

漱石文学における「高等遊民」について

池田光博

(一)

漱石の作品には、「高等遊民」とよばれる一つの知識人（文化人）階級が登場してくる。これは、漱石の文学を特色づける一つの要素となっている。

漱石は、彼の作品の中で、当時（明治の末期から大正のはじめにかけて）の社会に住む知識人の苦悩をとりあげ、それを追究している。その知識人としての苦悩を、より純粹に、またより深くほりさげて考えてゆこうとすれば、そこに、知識人の典型が要求されるようになってくる。漱石の文学における「高等遊民」は、そのころの知識人の一つの典型

的なタイプであるとして、さしつかえなからうと思う。

私は、漱石の文学を理解する一つの手がかりとして、彼の作品にあらわれた「高等遊民」について、以下、すこしばかりの考察を加えてみようと思う。

(二)

漱石の作品の中で、「高等遊民」ということばが用いられているのは、『彼岸過迄』の松本恒三という人物に対してのみである。私はこの松本を、漱石がえがいた「高等遊民」のサンプルと見たてて、彼にそって「高等遊民」のアウトラインをつかんでおこうと思

う。「文字通りの意味で僕は遊民ですよ」

（『漱石全集』（新書版）―以下作品からの引用はすべてこれによる。―第十卷『彼岸過迄』一三六頁）という松本は、当然のことながら職業をもっていない。職業をもつことから生ずる世俗の煩わしさをいっさい避けて、ひたすらにうちにひきこもつた生活をしている。松本の甥にあたる須永は、松本がこのよきな生活ができるのを、「（前略）財産の御蔭、年齢の御蔭、学問と見識と修養の御蔭である。」（第十卷『彼岸過迄』二四〇頁）としている。これは、高等遊民としての松本を、かなりの確にいいあらわしているといえる。ここで注目すべきは、ク財産の御蔭クということである。松本の、現実の社会と没交渉に近い、いわゆる超然生活をささえているのは、彼の財産であるという、この当然の事実をここでおさえておきたい。

職業をもたずに超然生活を送っている松本は、現実の社会に対しては傍観者にすぎない。しかし、傍観者には、当事者にはない余裕とそれにもなう視野の広さ、あるいは、筋道のとおつた思考力とがある。これが傍観者の強みである。松本は、初対面の敬太郎に対して、「社会観とか人生観とかいふ小六つ

かしい方面の問題を」(同上、一三五)も
ちだして彼を苦しめ、敬太郎から「此松本と
いふ男は世に著はれない学者の一人なのは
なからうかと疑ぐ」(同上、一三五)られ
たりするほどの知識人なのである。

以上のことを要約してみると、

○「遊民」である以上職業をもたない。そ
の前提として、財産(金)がある。

○現実の社会から自己を疎外して超然生活
を送り、自らは社会の傍観者の位置にい
る。

○豊かな教養と組織立った思想をもってい
る。一流の知識人である。

となるであろう。高等遊民としての松本のア
ウトラインを私は以上のように考える。それ
てこれを、漱石の文学における高等遊民の基
本線と考えてよいと思う。

(三)

『彼岸過迄』の松本を例にとって考えた高
等遊民のアウトラインを規準にして考える
と、漱石の作品における高等遊民は次のとう
りである。『虞美人草』の甲野さん、『それ
から』の代助、『彼岸過迄』の須永、松本、
『こゝろ』の先生。なお、このほかに、高等
遊民的な色彩の濃い、『吾輩は猫である』の

吾沙弥先生、迷亭、独仙、『三四郎』の広田
先生、『行人』の一郎などがいるが、ここで
は一応省略する。

(四)

本格的な高等遊民として最初に登場するの
は、『虞美人草』の甲野さんである。彼は大
学を卒業して以来、何らの職業もたずに、
ぶらぶらして、いささか神経衰弱気味に哲学
的思索をめぐらしている。ヨーロッパの公使
館に務めていた父が遺してくれた財産のおか
げで、仕事をもとめて、現実の社会にとびこ
んでゆく必要はないのである。

「高い、暗い、日あたらぬ所から、うら
やかな春の世を、寄り付けぬ遠くに眺めて」
(第五卷『虞美人草』一八)くらす甲野さ
んは、自己の人格を信じ、道義のすたれた社
会を、手をこまぬいて眺めているだけであ
る。しかも、この作品では、甲野さんは、一
応、事件の傍観者としての位置にいる。つま
り、漱石はこの作品で高等遊民としての甲野
さんを直接問題にしたのではなかったのであ
る。甲野さんのつぎに高等遊民としてあらわ
れるのが『それから』の代助である。『それ
から』で、漱石は高等遊民を主人公にもつて
きて、彼を恋愛という一つの大きな事件にま

きこませて、それを通して高等遊民の存在を
鋭く追究している。そしてその結果は、ここ
では、高等遊民の敗北に終わっている。

代助は「職業の為に汚^{やぶ}されない内容の多い
時間を有する、上等人種と自分を考へて」
(第八卷『それから』三〇)現実の社会に
おける貧と苦とを超越した生活をし、自己の
思想・情操の豊かなことを誇りに思っている。
彼のこのような生活をささえている根本
思想は、現実の社会に対する徹底した批判で
あり、絶望的な社会観である。「何故働かな
いって、そりや僕が悪いんじゃない。つまり
世の中が悪いのだ。」(同上、七五)とい
う代助は、超然生活をすることで、社会に対
する一種の反抗をしめしているともいえる。

しかし、そのような超然生活も、物質的に
は、父や兄に依存することによってのみ保た
れていたのである。したがって、父や兄の意
志にそむいて、三千代との恋愛をまっとうし
ようとした代助は、彼らから物質的援助を拒
絶されて、乞食の生活にまで落ちねばならな
いようなはめになるのである。

「門野さん。僕は一寸職業を探して来る」
(同上、二五二)このことは、高等遊
民としての敗北を如実に物語っている。愛と

いうもつとも強い自我の欲求の前に、高等遊民の存在は否定されたのである。

このように、『それから』で高等遊民の敗北をえがいた漱石は、それ以後の作品において、高等遊民の問題にふれなかつたのかというと、決してそうではない。前にも述べたように、『彼岸過迄』の須永、松本、『こゝろ』の先生は高等遊民である。しかし、ここで注意しなければならないのは、代助の苦悩とこれら須永や先生の苦悩とは、その質が異なっていることである。代助の苦悩は、自己の自我をおした時に生ずる高等遊民としての生活の危機である。現実における自己存在の不安である。つまり、自我にめざめた個人と社会の慣習とのたたかひにおける苦悩といえる。ところが、須永、先生のばあいは、敵はむしろ自分の心の中にいるのである。自己とのたたかひにおける苦悩であるといえよう。

このような苦悩の質の相違の転機となったものの一つに「修善寺の大患」が考えられる。伊藤整氏は、「夏目漱石の人と作品」の中でつぎのようなことをいっておられる。

「この所謂『修善寺の大患』は、人生を考へる漱石の目を新たににして、死の認識から生を深く考えさせるに至つたもののようにあ

る。」（近代文学鑑賞講座第五巻夏目漱石、一七六）このような境地からえがかれたのが、『彼岸過迄』以後の作品における高等遊民の苦悩なのである。ところが、すこしわけ入つて考えてみると、彼らの苦悩―それは、近代人の孤独やエゴイズムなどに根ざしたものであるが―それは何も高等遊民だけにかぎつた問題ではない。近代の社会に生きる人間共通の問題なのである。もちろん、漱石にとつても大きな問題であつたのである。

小宮豊隆氏は、著書「夏目漱石」の中で、「一口に言へば、漱石の爾後の作品は、漱石の内面の嚴肅な告白となり始めるのである。」（『夏目漱石』三（新書版）一四六―）とのべていられる。（「爾後の作品」とは『彼岸過迄』以後の作品をさす。）しかし、告白といつても、当時の自然主義系作家たちとはちがつて、自己の問題を明治社会における近代人の問題に普遍化して、論理的な観点から考えてえがいたものである。これは漱石の創作態度の根本であるが、このような問題を、より純粋に、より深刻に考えようとするために、『彼岸過迄』や『こゝろ』の先生を、高等遊民としてえがいたのだと、私は考えたいのである。つまり漱石は、彼らを、

日常的な衣食住の問題にわずらわされることのない高等遊民として設定することによつて、これらの作品におけるテーマを、より明確に、また、より純粋な形でうちだそうとしたのではあるまいか。極言するならば、『彼岸過迄』以後の作品における高等遊民は、借りのもの、の高等遊民だといえそうである。

それでは、借りのものでない高等遊民は―それは『それから』の代助でわかるように、自我の欲求をつらぬきとおしたために、高等遊民としての敗北を余儀なくされたのである。そしてその後にくもものは、生活能力の劣つた小市民としてえがかれている『門』の宗助であり、すこし飛躍するが、『明暗』の津田でもあるのである。彼らには、やはり高等遊民的なおいが残っている。高等遊民の末路と称すべき人たちである。